
NO, THANK YOU!

炉澪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NO THANK YOU!

【Zコード】

Z8238Z

【作者名】

炉澪

【あらすじ】

俺は物語の主人公にはなれない様なただの、極普通の、有触れた茶髪の少年と比喩されても可笑しくない、ただの一般人だつた。可愛い幼馴染はいるし、生まれながらに茶髪だが、それ以外は決して何もないただの人間だ。

だが、

『あなたも超能力持つてるから』

という、不意に、あまりに突然に母さんから言われたその言葉から、俺の人生は一変することとなつた。

iのべるという携帯小説サイトで書いていたモノを書き直して掲載するものです。

更新は出来るだけしますが、不定期です。

自宅が火事とやらになりまして

自宅が火事とやらになりまして

まず言おひ。冷氣を吐き出す冷蔵庫の様に冷たく、薄く、かつ重い溜息を吐き出してから、だ。

ちやちな自己紹介や特徴の描写はこの場には値しない。決して、そう、永遠に。永久の時間を過ごしたかの様な感覚が俺の背中に癒着して離れない。気持ち悪さが胸の奥からこみ上げてきて、吐き戻しそうになる。嗚咽を抑えて、喉を絞めて、拳を力強く握り締めたところで何も変わりはしない。

そう、俺は今そんな苛立ちと混沌を混ぜたかの様な渦中にいる。いた。

俺の肌を強烈な熱風が煽つた。そして、咽る程の黒煙が目の前で天に昇るかの様に揺らめいている。それも大量に。

「おー。派手に燃えてるな！ なあ、母さん？」

「そうですねー。ここまで燃えると逆に綺麗に感じますわ」

俺の住んでいる いや、住んでいた自宅は木造一階建ての周りに比べて比較的綺麗な青い屋根の家だった。ペンキも塗り替えたばかりで、新居気分、引越し気分でいたのは恥ずかしいながら認めなければならない。

が、その綺麗な家が、たつた今、油で煽られた中華鍋の様に轟々と音をたてて燃え盛つているのだ。

それはもう、熱氣よりも驚きで汗を垂れ流してしまつ程に、だ。

そもそも、どうしてこうなつたか、……、語つてやりたいのは山々だが理由は分かっていない。ただ、俺が友人のロリコン大魔神と

遊んで程よい時間で帰つてきたら、俺の自宅は藁山の様に燃えていて、その前には野次馬が集まつてきていて　の状況だつたのだ。

「ほれ、恭介も見てみろ！」こんな光景滅多に拝めないぞ。なんせ

自宅なんか燃やす機会がないからな！
ハハハハハハハハハハハツ！」

すんだよ!!

自宅が取り返しの付かないほどに燃え盛っているつてのに、コメ
ディ映画でも見ているかの様に豪快に大口を開けて笑うのは俺の親
父 郁坂流だ。熊の様な体型に面持ち、全てが重力に逆らうかの
様な短い黒い短髪はその厳しさを更に煽る髪型となつている。

「恭介！ お父さんにそんな口聞かないのー。」

なんでこんな時まで俺には冷たいんだよ！」

突き込む場所を間違えているこの綺麗なお姉さんは俺の、俺達の母親である郁坂奏だ。いくさかかなで背中まであるストレートの長い茶髪に、ワンピースが似合いそうな、おしとやかかつ大人びたモデル見たな体系。そして、明らかに年齢以下にしか見えない息子の俺からみても美しいと思える容姿。ちなみに、俺、俺達の茶髪は母さんの遺伝だ。

ええええええええ！」

と、俺が指さした先にいる超低身長の母さんを更に幼くしてスケールを小さくした写し身の様な少女は俺の、俺達の妹である郁坂椿^{いくさかづはき}だ。見た目は小学生^{よん}言つてしまえば低学年にも見えるが、一応中学二年生だ。未だ電車を子ども料金で乗れるのは公にしたくない。

「……」

と、俺がこの状況に慣れ、やつとの出遅れた嘆息を吐き出した時
だった。

ひ込もうとしている少年が現れた。
俺の横を通り過ぎて本当に飛び込みそうだったのでとりあえず首根っこを掴んでそいつを止める。

人間だ。

そう、こいつは俺の弟で、椿の兄である郁坂大介だ。いくさかだいすけ無造作に伸ばされた手の行き届いていない長くて、ぼさぼさの茶髪もやっぱり母さんからの遺伝だつた。

ご覧の通り、俺の家族は正直、イカれてる。ある種、だが。
「はあ……明日が休日でよかつたわ……」

俺は嘆息と共に嘆きの言葉をこの熱気が支配する空気中に溶かして、学業に影響が出ないであらう事を祈つた。

1

「恭介！ 家が全焼したんだって！？」
そりや良かつたな！」

「良いわけあるか！」叩き倒すぞ！」「

あの火事から一田経つた今田。俺はなんとか学校へと通うことが出来ていた。

だ。
県立三坂高等学校。中の中程の適当でござるでもありそつた高校

「ここら一体、つまりは俺達の地元である笠屋町は田舎町で、遠くに通うのが面倒だから、と自身のランクを落してまでこの高校に通う者は多かった。それで良いのかは当人に聞いてくれ。俺にはこの高校が限界だつたんだ。

朝から五月蠅い友人、ロリコン大魔神こと増田典明の頭を引っぱたき、俺は嘆息する。最近は嘆息、溜息が増えた気がする。一応気をつけては置こうか。

如何にも、なスポーツマン。それが、増田典明だ。顔は何故か整つていて、身長もそこそこありイケメンの部類に入ってしまう彼だが、肝心の中身が法律ギリギリのモノで出来ていて、正直女子からの評判は良くはない。ナンパはされるが、恋人は出来ないタイプだ。この前、「そのロリコン、止まりなさい！」とパトカーにスピードで呼び止められてたのは流石の俺でも驚きを隠せなかつた。

「いて……、そんな怒るなよ。ちょっとした冗談だつて」

俺に叩かれた頭を抱えながら言つ典明に、「冗談にならねえよ」と返して俺はまた嘆息する。

本当、どうして火事になんかなつたかな……。典明の言葉の通り、俺の自宅は全焼し、自宅だつた何かへと変貌を遂げていた。

今は、どうやって用意したのかは知らんが、親父が用意したボロアパートに五人で住んでいる。正直、狭い。五人が入るスペースはないのだ。

「で、今日なんだけどさ」

「ん？ 何だよ？」

「遊びに行つていいか？」

そんな極小スペースだというのに、典明は他人事だとそんなおちやらけたことを軽々しく吐いてみせる。

「無理、俺の家クソ狭いから」

「まあまあ、そう言わずに。そろそろ俺も椿ちゃんと遊びたいからさー。なあ、頼むよ」

「の口リコン野郎は言わズもがな、俺の妹である椿が大好きだ。

食べちゃいたい、の言葉の意味が変わつてしまつくらいに大好きらしい。

椿は中学一年生だが、その容姿はその何倍に幼く見え、最高で、いや、最低で小学生低学年にまで見られてしまつたことがあるくらいだ。

自宅が火事とやらになりまして・1

そんな椿は勿論、典明の大好物である。大好物を目の前にした口リコンがどうなるかなんて言うまでもない。

「あーはいはい。お断りですから」

「なんだよー。連れないなー」

「お前が勝手に盛り上がってるだけだろうが」

俺は再び嘆息して、適当なところへと視線を投げ出す。

時計を見れば時刻は八時前。まだ朝のホームルームも始まらない時間で、クラスは朝のホームルーム前の自由時間をそれぞれが謳歌していた。クラスメイト同士で楽しそうに談笑しているグループも見れれば、教室の隅で工口本呼んでるバカまでいた。これは酷い。

と、その時だった。

「きょううちやん。おはよう

空気中に散つてしまふ様な細く、かつ纖細、だが綿菓子の様にふわふわとした言葉が俺に掛けられた。

俺はこの言葉に聞き覚えがある。いや、そんなレベルではない。

聞きなれた、俺にとっちゃBGMの様な声だ。

「おう、おはよう。桃」

俺は彼女の名前と一緒に挨拶を投げ、視線を声のした方へとやる。そこには、子どもがいた。日本人形の様な長くて真っ直ぐで前髪を横一線に切りそろえた髪。子猫を連想させるかの様な幼すぎる容姿。だが、スウェットが似合いそうな最近の女子高生らしい雰囲気のあるそんな少女。彼女は俺の幼馴染である、春風桃はるかぜももだ。

彼女とも大分長い付き合いで、年齢イコールと言つても過言ではなく、家族同士の付き合いもあるのだ。

そんな桃が俺の自宅の火事の事を知らないはずがない。案の定、

「きょううちやん大丈夫だった？ 家が全焼しちゃつたんだってねえ。私の家も燃えちゃ わないか心配だよー」

と、話の内容とは対照的な非常におつとりとした空氣そのものと全く変わらない口調でそう言う桃。心配してくれているのは分かるんだが、口調のせいで他人事だと言われている様な気がしてならない。

「ああ……、つっても綺麗に全焼してくれたモンでよ。逆にスッキリしてゐつつーかさ。そりゃあイロイロと所持品燃やされたわけだし残念だけども」

「何か困つたらいつでも何でも話してね？ 長い付き合いなんだしれ」

「おうよ。ありがとな、桃。頼りにしてるぜ」

「桃ちゃん今日も可愛いねえ！」

「五月蠅い。黙つてろ」

「じゃあきょううちやん？ 私いくねー」

「おひ、またなー」

ちなみに、今のやたらと低い声の「五月蠅い、黙つてろ」という台詞は桃の口から漏れたモノだ。あまりの変貌つぶりに初見の人間は滅多に気付けないが、本当にそうだ。桃は聰明と喋るときだけ、こうなってしまう。

つつても、他の人間にはこんな重いセリフを吐きはしないから特別な問題はないんだがな。

クラスメイトの下へとバタバタと走つていく桃の背中を見送つて俺は再び 、

「なあ恭介！ なんで桃ちゃん俺にあんなに冷たいんだろ？……」

涙目で死刑宣告を受けた無罪の人間の如く俺に訴えてきた。冤罪を背負わされた人間つてこんな感じなんだろうなあ、といつ驚異的な見本である。

「お前がロリコンだから……、とは言わないけどよ。誰彼構わずにこんな変態的セリフを吹つかけるからじやねえの？」

「俺は誰彼構わぬ声を掛けたりしない！」

「ついさっきまで椿の話で一人で盛り上がりがつてただろうが！」

そしてまた。

気付いた。俺の嘆息の原因はきっとこいつだ。典明があまりにもボケるもんだからついつい突つ込みたくなっちゃって、精神的にやられてきたんだろう。きっとそうだ。

俺の嘆息は桃の言葉とは正反対でとても重い。空気中に溶けはせず、そのまま熟した林檎の様に地面へと重力に引かれるままに落ちて、砕け散つた。

2

俺の通う三坂高校は県立だ。しかも田舎町笠屋町にある古ぼけた高校だ。

そんな高校にはクーラーなんてモノはない。だから、初夏に足を踏み入れた今、教室の室温はバカにならない程高くなる。おまけに、湿度もだ。どうしてあんな蒸し暑くなるのかは分からぬが、きっと生徒達の汗がそうさせているのだと適当な予測を立ててみる。そうだとすると、あの可愛い女子生徒達の汗に包まれているんだー！なんて考えてしまいそうになつたが、共学である以上野郎共もいるわけで……、これ以上は何も言わないでおこう。

そんな蒸し暑さと数時間も戦いきつてやつとの放課後。

外に出れば涼しさが押し寄せてくる、なんてことはない。外は外で教室内とはまた違つた乾いた暑さが俺に降りかかる。逃げ場はなく、ひたすら肌を焼け焦がすしかない拷問の様な帰路を辿らなくてはならなくなる。

「あひ……、このままじゃ需要のなくなつたアイスみたにドロドロに溶けちまうわ……」

俺の口からは暑さのせいか意味不明なそんな弱音が漏れていた。

新しい自宅、仮住まいのアパートは三坂高校からそんなに遠くはない。

全焼してしまつた前の家と比べてもそう変わりはしない。

だが、なぜだらうか。道になれていなからなのか、今日の帰路

は少しばかり長く感じた。

笠屋町は基本的に……、いや、その全てが田舎だ。それもドが付いても良い程の、だ。隣町の真砂町はそこそこ発展した文明をお持ちだが、それはまた別の話。

そんな笠屋町の通学路はやつぱり田舎道で、現に俺が今ダラダラと歩いているのもその例外ではない。足元は整備不良のひび割れたコンクリートで、周りに見える景色は山、からぶき屋根の家、田畠、と相当な景色が広がっている。

更に良く見ればヤンキークラブが森の足元でエッチなことしてる光景なんかが見えてしまったが、好奇心や性欲よりも面倒事に巻き込まれたくない、という理性が勝つてなかつた事になる。

「はあ……盛つてんじゃねえよ、畜生。太陽もだけど」

はあ、と溜息を吐き出して俺は延々と続く先の見えない田舎道をひたすらに歩く。

この道さえ越えてしまえば、後は楽だ。住宅街に入れば景色も大分見栄えする物になるし、精神的には少し楽になる。

よし、頑張るぞー、と適当に息じんで額に滲む嫌な汗を腕で拭つたその時だった。

「恭介ー！ 奇遇だな！」

聞き慣れ……過ぎた声が後方から掛けられた。振り向かずとも分かる、典明だろ？。

相変わらず止まらない溜息を抵抗なく吐き出して、俺は仕方なしに振り返る。振り返って、やつと、気付いた。まず目に入るのは間違いない典明だった。ただし、汗だくで全力疾走中の典明、だ。

まるで猛獸に追われているかの様な走りっぷりに思わず、「気持ち悪いな」と呟いてしまいそうだった。

が、そんな余裕は一瞬でなくなつた。典明を追いかける『猛

『彼らが目に入つたからだ。』

典明の後方にはスーツを着た『いかにも』なスキンヘッドにサングラスを掛けたスーツを着た二人組みが獲物を狩る猛獣の様に全力疾走していた。勿論獲物は、典明であろう。

そして、典明はその猛獸一人を引き連れて
へと向かつて来ている。

「さあー？ 一いち向かってくんない？」
「あいつ、俺を巻き込むつもりかよ！」

「一本道なんだから仕方ないだろーー！？」

そう言いながらも典明も猛獸達も走り続け、あつという間に俺との距離は縮まってしまう。そうなれば、俺も走るしかない。

俺は早急に走り出し、典明達に出来るだけ近づかれない様に全力を出した。俺は運動神経は良い方だ。頭はソコソコだがな！ だか
ら、典明達との距離は一定を保ち続ける事が出来た。それに典明も
猛獸達も俺が走るよりも前から走っている。体力的な問題もあつて
か俺が追いつかれることはないのだ。

ふはは、典明め！ 俺を面倒後事に巻き込もうなんてするからだ！

俺に絶対安全圏にいる
なんて思っていた
したんだ

「有坂恭介しやねえか！ ハハヤー！ まさか本命あて案内してく
れるとはねえつー！」

た。が、俺は安全圏になんかいなかつた、と思い知らされる事となつ

背後……いや、遠いはずなのにやたらと近くから響いた声に俺は思わず足を止めそうになってしまった。勿論、今呼ばれた俺の名前は聞き間違いかも知れない。だから、俺は決して焦つたりせず、一瞬だけ迷つた思考をすぐに振り切つてまた全力で駆け出したのだ。面倒から逃げ出すために。

「郁坂恭介え！　てめえの親父から受けた痛みをてめえに倍で返しこいつからなあ！　樂ノナニコレ大あー！　がやはな！」

だけど、俺の思考は遠く離れた位置から再び近くまで引き寄せられ

れてしまった。

(あのヤクザ連中 なんで俺の名前を ッ!?)
やはり、驚きから足を止めてしまいそうになつた。だが、俺は振り返りも止まりもしなかつた。言わずもがな、面倒事が嫌だから。緊張はストレスになる。とつとつこの現状から抜け出して典明をぶん殴つて折檻してやりたい。一度、そう思つて心中で悲鳴を上げた時だつた。

「ぐあつ!!」

突如として聞こえて来た典明のか細い悲鳴と、何かが弾ける様な音を聞いて俺はついに立ち止まつてしまつた。

俺が振り向くより前に、『何か』が無様にも倒れる音が耳に届いた。その『何か』が、典明だという事に気付くまでにそう時間を必要とはしなかつた。

「典明イ！」

俺は目の前に危険な人物が二人もいることも忘れ、典明の下へと駆け寄つた。近づけば近づく程彼らとの距離も近づいてしまうのだが、そんな事を考えている余裕はなかつた。この時俺は、彼らが典明に何か危険なことをしたのでは、と疑つていた。事実、そうなのだが、その時俺が考えていたのはもつと現実的な物で、決して『超能力』なんて幻想的な物ではなかつた、と言い切れる。

「おい！ 典明！ シッカリしろッ！」

俺が必死に叫び、典明の身体を搖さぶると、ある光景を見つけてしまつた。典明の着ている学校制服のカッターシャツの背中が、くりぬかれたかの様に巨大で、焦げ臭さを放つ穴を開けていたのだ。見れば、穴の淵は炭の様に固まり、黒く焦げていて、その穴から見える典明の背中は火傷したかの様に赤く膨れ上がり、所々水ぶくれを起こしてしまつていた。その光景はまるで、そう、稻妻に撃たれたかの様な光景だつたと言える。

(……何が……?)

相手が相手なモンだから、俺はてっきり銃にでも撃たれたのかと思つていたが、典明の背中に広がるその傷は間違いなく銃弾によるモノではなかつた。勿論、本物の弾痕を見た事はないが、素人目でもそつと分かるほどにこの結果は明白だつた。

と、典明に落していた視線の隅に、靴の先が写しされる。土を爪先で擦る音が嫌に耳に付いた。反応して視線を上げると、やはり二人の猛獸が目の前にいたのだつた。

二人組みの男は俺と典明の事を二タニタと不気味な笑みを浮かべながら見下ろしている。涎に塗れて輝く並びの悪い歯が不潔感を俺に印象付けた。

「郁坂恭介え……探したぜえ……」

片割れが落ちてゐる大金を見つけたかの様な調子で俺に吐いた。

「さつきつから、何で俺の名前を……?」

ヤクザなんかと対面させられて、俺は正直怯えていた。何故か俺を狙つているヤクザ一人。この状況まで追い詰められれば逃げ道はない。何か、恐ろしいことをされてしまつのではないかと嫌な予感が脳裏を過ぎり、常駐してしまつ。

俺の震えた声での質問は相手にちゃんと伝わつたのだろうか、と、他に心配ことがあるだらう、と言いたくなる様な疑問が頭に浮かんで離れなかつた。

勿論、震えた声であるうと距離が近いだけに声は簡単に届き、

「なんでつて、そりやお前が郁坂流の息子だからだよー!」

「親父……親父がなにか……?」

「俺等はなあ、君の父親……郁坂流に恨みがあるんだよ。だあかあ

らあ、息子である君に償つてもうおうかなあつて俺達は考えてるんだよねえ」

「そうそう。郁坂流はバケモンだからあ、ただの人間な君に仕返しをしようとねえ、」

なんて身勝手で我儘な理由だ、とは混乱して落ち着きの取り戻せない頭でも思えた。

それに、こいつらが親父とどういう関係にあるかは知らないが、俺は親父は間違つたことはしない、と信じている。だからきっと、こいつらは身勝手な事情で勝手に親父を恨んで、俺を巻き込んだんだろう、何も考えずとも思えた。

面倒事はごめんだ。ずっとそやつてイロイロと避けてきた。だから、俺はいざ面倒事に巻き込まれた場合の行動を頭に入れてなんかいない。だから、ただひたすらに力に怯えて、身と心を振るわせるしかなかつた。

背筋が凍りつき、喉を素手で掴まれているかの様な苦しさが胸の内から面へとこみ上げてくる。

こんな状況からは早く去りたい。そうは思うが、友人『典明』を置いていく、という考えは俺の頭には浮かばなかつた。

面倒から逃げ出したい。そうは思うが、そんなことよりも、傷ついた友人を救うのがマズ先だと本能が叫んでいた。勿論、典明の背中の傷は大した事なく、命に関わるなんて事は絶対にないのだが、焦つた俺は典明が死んでしまうのではないかと思つてしまつていたのだ。

だから、この場を離れて背を向けて走り去ることが出来なかつた。「さあつて、と。周りに人はいねえみたいだし、とつと片付けて帰らせてもらいましょーか！」

「そうだなあ！」

連中二人がそう言つと、不意に、連中一人の掌の中での『青い閃光』が弾けた。

先程聞いたのと同じ、空氣中で何かが弾ける様な音が今度は目の

前で聞こえた。勿論俺は驚愕して目を見開かせ、頭の中を真っ白にした状態で連中の掌、音のした方へと目をやった。

すると、そこには、

「さあ、死ね」

そう言つ連中の掌、その中には、青白く、夜空の様に輝きを放ちながら弾け続け、その姿を常に変え続けている『稻妻』を見つけてしまった。それは、掌に纏う様に連中の掌の中、上で流動し続け、酸素を爆発させながらその勢いを加速させ続けている。

「な……なんだよソレ！？」

俺は完全に状況に中でられ、思考を完全に停止させ、視線を連中の掌に釘付けにして、俺はただ怯えていた。その間も、連中の青白い稻妻を纏つた掌は俺の頭を驚撃みにするかの如く伸びて来ていく、（……もう、死ぬのか……？）

素直に、本能が死を感じ取つた。

この掌が俺の頭に届けば、その瞬間に俺の意識は吹き飛び、全身を激しく痙攣させながら無様にも死ぬのだろう。そんな残酷な現実がハッキリと脳に浮かび上がった。

こんなにも簡単に、人生が幕を下ろしてしまうのだ、と恐れ

俺は決して主人公格ではなく、ただのモブとしてそこら辺をうろうろと歩き回って景色を作り上げれば良いのだという、そんな立場の表れだったと思う。

諦めた
ことにした。
訳ではないが、諦めのついた俺はそつと、臉を下ろす

最後が、見知らぬ野郎の稻妻を纏つた掌より、妄想の仲の桃源郷の方が僅かでも心地よいと思えたからだつた。

下ろしきる前だつた。俺に向けて掌を突き出していたヤクザ二人から引き裂く様な悲鳴が大音量で叫ばれた。その叫び声はきっと町

中に響いたと思う。それ程の声量だった。それを田の前で聞いた俺は思わず身を震わせた。

（何が？）
余りに突然の、予想外な出来事に俺は反射的に顔を上げて現状の

確認に移つた。

と、目の前には相変わらずヤクザ達の影。それもやはり一つ。が、その一人は俺なんかに注目はしておらず、首を振り返らせ、自身達の後方に視線をやつて、絶句していた。冷や汗を垂れ流し、体を硬直させる連中は、まるで猛獸にでも睨まれているかの様に怯えていたと思えた。

何が？ と、俺は首を伸ばして連中の隙間からその奥にいるであらう何かの存在を確認しようとする。

が、その時だつた。

二人いる連中の片割れが、突然意識を絶たれたかの様に、バタリと力なく倒れたのだ。

あまりに突然、拍子もない出来事に俺もヤクザも驚き、目を見開いて倒れたヤクザへと目をやる。一瞬の判断だが、外傷は全く伺えなかつた。まるで、恐怖に中てられて意識だけを失つた、といわんばかりの状況だった。

全く何もわからない状況の中での、俺は自我を保つために頭を振りかぶり、もう一度、と視線をヤクザの向こう側へと投げる。

卷之三

何故だろうか、獲物を狩る猛獸の如く、拳を掲げてこちらへと全力疾走してくる親父の姿が見えた気がした。

いや、間違いなくあれは親父だ。郁坂流だ。

新父の形相は兎の如く恐怖たてを残して亞み見ただけで失神しても可笑しくない様な、とてもこの世の物とは思えないどんでもな表情になつていた。

そりや、あの顔見れば気絶もするわ。
ザにも少しばかり同情してしまう。

親父は百獸の王も尻尾を巻いて逃げ出してしまいそうな雄叫びをあげながら全力疾走でヤクザへとあつという間に辿り着き……、そのごつい、岩の様な拳でヤクザの頬をぶん殴った。

俺の目の前で起きたその光景は酷いモノだつた。親父の拳を叩き付けられたヤクザの顔面は波打つように派手に歪み、数本の歯と涎鮮血を空氣中に花火の様にばら撒きながら、あつという間に吹き飛び、田んぼに突つ込み、泥を巻き込みながら「ロ」ロと数十メートル程転がり、田んぼを一つ越えた時点でやつと、その動きを止める

「ことが出来たようだ。

ヤクザは泥まみれで、距離もあり、目を凝らさなければ今一その存在も確認できない。

「お、親父……！？」

「ワハハ、恭介。俺の『た』に巻きこもじまつて、すまないなあ！」

なんて呑氣なおじさんだらうか。

「ちょ……！ そんなことより、典明が！」

聞きたいことはいくらでもある。だが、そんなことは後回しだ。今俺の足元には負傷した典明がいる。このタイミングになって俺もやつと、典明が死ぬほど傷ではない、と気が付くが、それでも心配だつたのだ。

「ふむ？」

親父は僅かに唸り、しゃがみこんで典明の背中の火傷の様な傷跡をまじまじと観察するかの様に見つめて、

「これくらい寝でも付けとけば治るわ！ がははは！」
と、親父はコメティ映画を見ているかの様な陽気な笑い声を上げてバンバンと干した布団を叩くかの如く典明の傷跡を何回も叩いてみせる。その度に典明の体が反動やら痛みやらでビクンビクンしているのが少しひテスクな光景にも思えた。

「つーか、こいつら何なんだよ！？ なんか、親父のこと言つてたぞ！」

典明の無事を確認した俺は話しの路線をシリアスな方向へと乗せ変えて、足元の意識を失つたヤクザに人差し指を下ろして怒鳴るよう親父に問う。

こいつらは「親父の仕返し」だと、俺を襲つた。俺を探し出すために典明に行き着き、今までの様な状況になつたのだろう。

だとしたら、親父が何か原因を持つてゐるはずだ。

問いただしてやらねえと気がすまない。なんたつて俺は被害者だからな。

「つーか、あれくらいの土壇場には慣れておかないと後々こまるわよ？ 文句言つてんじやないの」

が、母さんは相変わらずの俺への態度でそんなことを言つてみせた。

何考てるんだ！ 息子が死にそうだつたんだぞ！

と、俺がガラにもなく真剣に怒つてやろうかと思つたその時だつた。

身長の高い親父が少しだけしゃがみ、俺と視線を合わせて、こんな『ふざけたこと』を言つてみせた。

「恭介。超能力つて、信じるか？」

「はあ？」

親父のセリフは、今の俺には理解できなかつた。勿論、単語単語の意味がわかる。そこまでバカじやねえしな。だが、文としての意味はさっぱりだつた。こんな状況で、「超能力を信じるか?」だと? それこそ、親父の言葉が本当なのか信じられるか答えなくてはならない。

「こんな状況だつてのに何言つてんだよー?」

俺が怒鳴ると、

「そうだよね。まあ、最初は信じられないよなあ」

と、親父は俺の求める答えを決して吐かずにそんな独り言みたいなことを呟く。

質問に答えるよー……俺がそう叫ぼうとしたその時だつた。

珍しく、母さんが俺の肩に手を置いて俺を振り向かせた。素直に振り向くと、母さんの見た事もないような真面目な表情が目の前にあつた。滅多に見れないであろう母さんの真剣な面持ちに俺は思わず息を呑んで、叫ぶのも忘れて母さんの言葉を待つてしまつた。

数秒もない、長い時間が過ぎて、母さんの薄く綺麗な唇から、言葉が漏れる。

「信じられないだろ? けど、私達は超能力者なのよ。信じられないだろ? けど、ね」

「はい? 何言つてんの?」

全くもつて理解できそうにない言葉に俺は思わず首を傾げた。

超能力を信じるか? 超能力者だ。理解できるかよ!.

「何言つてんだよ? さつきから! 俺が、息子が殺されかけてんだぞ! ? 何呑気に冗談言つてんだよ! ?」

そろそろ堪忍袋の尾が切れそうだ。この親共、……、一体何考えてやがんだ。今までやたら呑気だよな、とは考えていたが、まさかここまで酷かつたとは思わなかつた。火事のことは、まあ、命あつたし流せるとしても、今回ばかりはそうはいかない。

と、俺がコメカミにビキビキと太い血管を浮かび上がらせ始めた

と同時だつた。俺の目の前にいる母さんは、『俺の怒りなんかがち
つぽけに思えるくらいの怒りの表情』まさに鬼そのものといえ
るモノ　　を浮かべて、

「うつー!?」
と、俺の九尾に的確すぎる正拳突きを放ちやがった。

確実に仕留めるために打ち込まれた母さんの正拳突きは、これでもか、と言わんばかりにクリティカルヒットして俺の全身に激痛を走らせ、感覚を搖さぶつた。

そんなプロボクサー顔負けの一撃を貰つた俺の意識は、フエードアウトするかの様に、徐々に消えて行くのだった。

新居が見つかりました

新居が見つかりました

前回までのノーセンキュワーはつ！？

なんてカッコいいセリフで俺の物語も始まればきっとそれは、大変景気がよくて、最後にはハッピーエンドになるであろう物語だろう。

だが、俺の物語はヤクザ一人に追いかけられ、実の母親に気絶させられるところから始まった。始まってしまった。

「はいはい、超能力超能力」

氣だるそうに俺は吐き、嘆息した。

火事のために我が家は消失して、今は小さなアパートに五人で住んでいる。

そんな小さな空間に俺たち家族は集まり、ちょっとした大きな話題で盛り下がっていた。

「ほんと、あんたつてクソつたれね！」

「母親の言葉かよソレ！？」

はあ、と溜息を吐き出したのは母さん。見た目こそ若く、美人と分別しても可笑しくはない美しい人間だが、その中身は最悪だ。普

段は、俺以外と接する時は、極普通のおしとやかな美女のだが、何故か俺と接するときだけは異常に冷たくなるのだ。ご覧の通り、簡単に暴言だって吐いたりする。

まあ、もう慣れたがな。

「……で、超能力を信じろって話。マジで言つてんのかよ？」

俺が幾度となく交わした質問を何度もか分からず、まま聞くと、母さんと親父は、流石夫婦だなあ、といった具合に同じタイミングで縦に首を振つて、

「そうだ」「信じなさいよ」

と、言う。

が、証拠もなしに信じられる話ではない。それに、二人はその証拠を見せない。

正直、あのヤクザ連中一人が出していた青白い稻妻のこともあるが、時間が経つた今はそれを何か見間違いか、で片付けてしまっているから、証拠になる物がないのだ。

そもそも、証拠があつても簡単には信じられるモノではないだろうがな。

この場には郁坂家が揃つているが、大介は一人部屋の隅で俺達に背を向けてイヤホンまでして携帯ゲーム機でゲームしてるし、椿はキヨトンとして俺達に「何バカしてるの?」という冷たい目線を送つている。

そんなわけで、五人居てもここには俺、両親の三人の世界が出来上がつていた。

「じゃあ超能力見せてみろよ?」

結局はそこだ。証拠がなけりや俺は決して信じない。だから、そつ何度も言つてているのだが、

「うーん。俺のは見て分かるモンじゃないし……、超能力者同士でしか実感しにくい能力だしなあ。『他の』もあるけど……、結局は手品とか言われそудаし」

と、呑気に親父。

「……、私のを見せたらこんどは火事じや済まなくなるわよ?」

と、やたら調子の良さそうな母さん。

と、まあ、ずっとこんな調子で一人は肝心の証拠を見せようとしない。と、いうか、いつの間にか両親とも超能力者設定になつていて、俺も正直驚いている。

「はあ

「溜息付かないの。老けるわよ?」

「……さいですか」

はあ、と俺はまら嘆息。

結局、その日は、何も進展なしに、この話は終わってしまったのだった。

3

「じゃあ、行つてきまー」

と、俺は学校へ向かうために自宅を飛び出した。挨拶はしても、両親は朝早くに仕事に行つたし、大介も椿も部活の朝練に行つてから俺の挨拶は独り言となつて虚しく宙に消えた。

しつかりと施錠し、確認し、俺は意気揚々と……とはいかないが、極普通の、至つていつも通りのテンションを抱えてアパートを出る。と、アパートの敷地を出たところで、

「よお

典明を見つけた。

新居が見つかりました・1

……典明を見つけたのだが、俺はあえてそのまま放つて横を通り過ぎてみた。

「ちよちよちよつ！ 恭介え！ 何でシカトするんだよ！？」

「何でお前は引っ越したばかりの俺ん家しつてんだよ！？」

面白い（ないて縮る様な）反応を見せてくれたので、俺は振り返つて反応してやる。と、典明は構つてもらえて嬉しいのか、表情を急に明るいモノへと変えて、

「一緒に学校行こうぜ？ いっちはんに引っ越してからは桃ちゃんに行つてないんだろ？ だから俺が付き添いに……」

「……、」

「ちょ、わー！ わー！ 無視しないで！ 置いてかないで！」

と、こんな感じで俺は典明と学校までの道のりを歩まなければならなくなつた。

長い道のりを野郎一人でダラダラと歩く。季節は夏の初め、こんな熱い中を野郎一人で歩くなんてむさ苦しくてしかたがない。イメージで言えば、上半身裸のムキムキのボディービルダーの男一人が絡み合つていてるイメージだ。……、うわ。気持ちわりい。

「でさー。結局あの時の事件ってなんだつたんだろうな？ 怪我も綺麗さっぱり治つちゃつたしよ」

「……、多分夢を見てたんだろうよ」

「夢？ そうかな？」

典明の言つあの事件とは、あのヤクザ一人に追いかけられた時の話だらう。典明は背中にヤケドを負い、意識を失つたのだ。それどころか、親父にその傷跡をバンバンと叩かれまくり、体をビクンビ

クンと痙攣させていた。……その件に関しては完全に親父が悪いので、俺はあえて言及しないでおこうと思う。

「うーん。なんか納得いかないけど、まあいいや」

「こ覧の通り、典明は単純な男だから、触れないでおぐが一番良いのだと思う。

「まあよお、あんな体験なんて滅多にできないだろうし、あれもあれで良い思い出じゃねえの？」

「夢だつたんじゃなかつたのかよ……？」

訝る典明に適当な言い訳をして、学校へと進む足はより速まる。そんなこんなであつという間に時間は過ぎ、俺と典明は通いなれた三坂高校へと辿り着く。

遅刻もせず、極普通の時間に辿り着いたこともあってか、門の前にも、校庭にも壁一面に並ぶ窓の向こうにも沢山の生徒の影が見える。

と、その中に、見覚えのある熊の様な人影を見つけてしまい。

俺のテンションは一気に急降下してしまった。

「なんでいるんだよ……？」

俺は思わず嘆息し、頭を抱えた。

そんな俺の様子に気付かない典明は、門の前で挨拶活動をする生徒会の可愛い子に挨拶しに行って何故かビンタされて泣きながら校舎へと走り去つて行つてしまつた。

……なんだ、あいつ。

俺は見つけた影へと目をやる。校舎の入り口から少し横にずれたところに、 熊が、……間違えた。親父がいた。

親父も遠目だが俺に気付いた様で、何故かニヤリとしたどことなく得意げな笑みを俺に向けて浮かべた気がした。

……、なんだ、あの親父。つーか、今日授業参観でもあつたか?

……いや、他に保護者の影は見えない。それに、親父は「仕事」だつて言つて出て行つた。

(何を隠してやがる……?)

親父はそのまま俺から視線を外して、校舎の中へと消えて行った。

「…………、」

「おはよひびきやこます!」

「おはよひびきやこます」
「お、おはよひびきやこます」

俺は気が気でなく、適當な 生徒会の人間には少し申し訳なく思える様な 挨拶をして、俺は親父を追い掛けることにした。あの得意げな、外連味たっぷりの憎たらしい笑み、むかつくなあ。

4

親父はトコトコとただそつ歩くよひプログラミングされたロボットの様に歩き、一階にある職員室へと消えて行ったのだった。

余談だが、文句だが、職員室は、職員室だけはクーラーがあり、俺は適当な嘘を付いて職員室に逃げ込むことが多い。まあ勿論、嘘なんか簡単に見抜かれて、適当にあしらわれてあんまり長いはできないんだがな。

「どこに行く気だよ…………？」

親父は「失礼します」なんて簡単な挨拶もなしに、職員室へと消えて行つた。扉がしまってから、俺はすぐに駆け寄つて扉に耳をあてて聞き耳を立ててみる。中からは何故か親父の高らかな笑い声が聞こえてくる。それだけ聞けば、親父が職員のようにも思える、断じてそうなはずはない。

俺だつて一年以上この学校に通つてゐるんだ。そのくらいの知識はある。

暫く聞き耳を立てていると、不意に、背後から声を掛けられ

た。

「きょううちやん、何してるの？」

聞きなれた柔らかな、おつとりとした声。俺が振り返ると、そこには桃の姿があった。あまりに身長が低く、幼くも見えるモンだからか、良い意味で夏の制服が似合っていない。まるで、子どもが大人に憧れてコスプレまがいのことをしているかのように思える。

「しつ、静かに」

俺は言い訳などせず、ただ桃に静かにする様に人差し指を口元に当てて黙るように促す。と、桃は黙つたまま縦に首を振つて頷いて承諾してくれた。流石幼馴染、従順つですばらしい！

……そんな煩惱は振り払つて、俺は再び耳を職員室の扉へと戻し

、「なあにをしているのかあつ！？」

ガラガラガラッ！ と扉は開き、俺の耳は鉄の扉に擦り切られてしまうかと思った。

「いつてえつ！？」

つと、俺が耳を押さえながら身を引くと、開かれた扉の前に一人の先生を見つけた。腕を組み、その豊満なバストを強調するかの如く仁王立ちしている白衣に身を包んだショートカットの茶髪に包まれた妖艶な表情の美人は、

「あ、庵先生」

桃が声を上げてみる彼女は、この学校の保健の先生である庵薰先生じゅうかおんだ。その容姿から、俺含めた男子生徒諸君には大人気である（ただし、典明は除く。本人曰く『ちょっと成長し過ぎてる』、とのこと）。

「庵先生！ お、おおお、おは、おはよひじぞーします！」

知られているとは思うが、俺は庵先生の大ファンだ。そんな俺は耳の痛さも忘れて飛び上がるよつに背筋を正して、眠気も親父への不信感も吹き飛ばして格好付けた俺は挨拶をする。

そんな俺に天使の庵先生は一ツコリとした天使らしい天使そのものの笑顔を向けて、

「さあ、授業始まるから教に帰りなさい？」

と、諭す様に微笑み掛けてくれた。

言わすもかな、俺は年上で色気たっぷりの女性が大好きだ。それはもう、食べちゃいたいくらいに。

そんな俺が庵先生にそんな優しい笑顔

「はい！ では、先生。また後ほど！」
頭の中からは親父の事なんて吹き飛んでしまって、あつという間に歩き出してしまうのだった。

「おふくちゃん、後はどうして？」

隣で桃がそんな事を言いながら可愛らしく首を傾げるが、今の俺の脳にはその景色は入つてこなかつた。

庵先生美人過ぎる

そんな教室中に響き渡る苦悩の叫び声を頭を抱えながら上げたのは、珍しくも俺だった。授業中だつたために、クラス中の生徒が「はあ？」と驚き、その全員が俺に視線を向けている。

今は国語の授業中だ。ひよる眼鏡という言葉を体言するかの様な先生までもが、俺に驚いていた。

「か私の授業にでも不満があるのかね！？」
「あ、いや、なんでもない、です……」「

時間が経つて我に返った俺は、とりあえず申し訳なさそうに後頭

部を搔きながら周りにも「『めん』と適当に謝つて席に座り直した。

「どうしたんだよ？ 恭介？」

隣の席の典明が普段決して見れない俺の姿に驚いた様で、囁くよ

うに聞いてくる。

「いや、なんでもねえよ」

「そうか……まあいいけど」

そう言つて、典明は視線を適当なところに投げた。ビリヤリ、授業は聞く気はないらしい。

それにしても、しまつた。本当にまずかった。

視線をひょろ眼鏡の上、時計へとやると、九時過ぎになつていた。俺が庵先生と会つたのは確か八時前だったか？ となると、俺は三十分弱も『惚けていた』ことになる。

（何やつてんだ俺は……。親父の後を着けるんじゃなかつたのかよ……）

（今までなるとあまりの惚けつぶりに自身に呆れてしまつ。典明が重度の口リコンな様に、俺はその逆、重度の『姉萌え』なんだ。きっと、典明ならこの気持ち分かつてくれるだろ？ ……、分かつてもらつても嬉しくはないがな。）

「ちょっと、何急に声あげてんの？ 寝ぼけてた？」

と、斜め後ろの席から声を掛けてきたのは『蜜柑^{みかん}』だ。可愛いが、妙にテンションが高くてお笑い芸人の様な扱いを受けてるボーネールの明るく、スタイリッシュな女の子。この三坂高校に入学してからであつた……からなのかは分からないうが、苗字は思い出せない。

「いや……、思い出し笑いみたいな感じ」

「いやいや、あんた笑つてはいなかつたよ？」

「似た様な感覚だつて事だよ。思い出し驚愕的な……」

「何それ。ウケルんだけど」

「へいへい。授業中だし静かにしようぜー」とかく、どうするべきか。

とにかく、一時限まで終われば一五分だけだが、ちょっとした休

穂が挟まる。その時、その時に職員室に突撃しよう。普段から似た様な行動はしてるし、きっと怪しまれず、大丈夫なはずだ。

三時限目の途中で、俺は前回と似た様な叫び声を上げていた。

ちなみに三時限目の今は、数学教師が不在なため代わりにひょろ
眼鏡（先程と同様）が教卓に座っていて、自習となつてゐる。

勿論、俺がそんな声を上げたもんだから前回のコレと似た様な景色があつという間に教室に浸透していった。

「な、なななななな、な、な、なんだねチミは！？ 君は確かあ
いくさかきようすけ
……、郁坂恭介君！ 君はなんだね。アレなのかね？ 私のことが
嫌いなのね！？ ええ！？ もう先生この現代っ子に堪えられない
！ ああああああああああああああああああああああああああああ
あああ！-！」

ひょろ眼鏡は俺を指差し、その散らかりかけの髪を「うぎやあああ」という絶叫と共に搔き剃りながら、教室から真っ直ぐ出て行ってしまった。バタン！ という強烈な扉の閉められる音が教室中に響き、クラスメイトの視線は俺から離れて教室の前の扉へと移動していた。

「な、恭介！ 一体どうしたってんだよ？」

先生がいなくなつたためか、前回のそれよりも大きな声で隣の典明がそう聞いてきた。

၁၁၁

いや、ごめん。なんでもない……

とりあえず謝り、俺は再び席に座り直す。

仲の良い連中は、

「あはは、恭介またやつてんのー」

この蜜柑の様に、気にはしていないようだが、俺とあまり馴染みのない連中（特に女子）からば、「何あれ？ どうしたの？ 朝もやつたよね？」「薬でもやつてるんじゃないのかしら？」「郁坂君……だつたかしら。何、変人？ 変態？」と、散々な言葉が僅かながら聞こえてくる。

しまつた……、本当に、何やつてんだ俺は……。今までにもこんな事　あつたか？　いや、なかつた。そう考へると、あの麗しき庵先生がどうにも『わざと』俺を職員室から遠ざけたような気がしてならない。

いや、絶対そうだ。そもそも、なんでこんなベストなタイミングで保健室担当である庵先生が職員室、しかも出入り口なんかにいるんだつてんだ。

（くつそ……、ハメられているような気がする……）

クラスメイト達からは「先生いなくなつたし喋りつけー」なんて会話が聞こえてくる。

……今なら、職員室に入つても誰も文句を言ひやしないよな？思つたら行動。俺は席を立つ。と、

「どうしたんだよ？　恭介？」

隣の典明がヘラヘラ笑いながら聞いてきた。

「ちょっと、トイレ」

俺は適当な嘘を付き、足早に教室から飛び出した。なんせあんなバ力な事を起こした後だ。俺が席を立てば周りの目を引いていかんせん気が重くい。そんな重い気を吹き飛ばすかの様に、俺は振り返りもせずに教室を出たのだった。

俺もの所属する二年二組は二階で、職員室は一階にある。だから俺はそのまま静かな廊下を教室から向けられる生徒達の視線を無視して突き進む。

（親父も庵先生も、なんか今日は様子が可笑しい。何を俺に隠してやがるよ？）

俺はそんな考へを持つたせいか妙に苛立つていた。そんな苛立ちをぶつけるかの様に、進む足に力が入り、廊下を歩く音が少しだけ

大きく響いている様な気がした。

こんな田舎町の小さな高校である三坂高校の校舎は他の高校に比べて小さい。そんな校舎内は少し進むだけであつといつ間に職員室へと辿り着いた。

俺の予想じや、また、庵先生が邪魔する準備をしているはずだ。
そんなじょうもないことを俺は想定して、今度は前回とは違う前
の手の入り口ミミを塞ぎや。

やつして、これ行かん、と云つてゐる。

という謎の叫びと共に、俺がたつた今前に立とうとした職員室前の扉からあのひょろ眼鏡が泣きながら飛び出して、俺の存在に気付いていないのか俺の横を通り過ぎてどこか遠くの方へと走りさつて行つたのだった。心なしかその姿は、少しだけ老けている様に思えた。

「なんだ？」

突然の出来事に額に汗が滲むほどに俺は驚いていた。その汗を拭つて、気持ちを改める様に溜息を吐き出して、俺はひょろ眼鏡によつて開かれた職員室の前の扉の前に立ち、

「向しているの? やめようがん?」

いざ行かん！ という時に、背後から聞きなれた空氣に溶けてしまいそうな、綿菓子を連想させる可愛らしい声が聞こえた。

「うわー！？ 何でここにいたんだよー？ 桃？」

驚き、振り返ると、そこには案の定桃かいた、ちょこん、という擬音がしつくりくる佇まいで俺の目の前に立つ桃は、可愛らしげに首を傾げ、俺を見上げていた。やめろ、惚れる。

「何で？ わたしはきよこちゃんが急にどこか行くのと同じだから面白がって着いてきただけだよ？」

と、桃は小動物みたいな小柄で可愛らしい容姿でそんなふうに

ことを抜かす。本当は黒い女の子なんじゃないか、と疑つてしまいそうだった。

「やつか。良くなきらいけど授業中だし教室に戻れよ」

言ひが、

「じゃあ、きよひやんも戻るよ?」

と、俺の制服の裾を摘んでどことなく嬉しそうにやつて見せる。

……、くつそ。かわいいなあ、畜生。大体、幼馴染だつてだけで俺の心臓は高鳴つてしかたがないってのに。今は引越しして一緒に朝登校することはなくなつたが、一緒に登校してた時は、それはもう、半分惚れてしまつたとも。ええ、それが現実リアルな男の心中ですよ。それに、桃はもともと可愛いし、正直年上のお姉さんだつたらどれだけ良かつたかと日々考えて寝込んだ事も……（省略）。

「い、いや……。俺は職員室に用事があつてだな……」

「じゃあ付き添つよ?」

「うつ……」

何故だか分からぬが桃は天使の様な笑みを浮かべながら俺の提案を拒む。思わず冷や汗を垂れ流してしまいそうになるが、眉をひくつかせるだけで俺は堪えた。

（しかたない、か）

結局のところ、俺が桃を無理矢理引き剥がすことは出来ないんだ。だから、連れて行くことにした。まあ、親父の事を聞くだけだし何の問題もないだろうよ……、多分。

そうして、俺は桃を連れて職員室へと踏み出した。同時。

「あ

「え

「流さん?」

俺は間抜け面の親父と、さつそく対面した。

親父は何故なのか、職員室の前方に設置されているホワイトボードから、その半身を職員室へと出していたのだ。いや、正確に言え

ば、何故かホワイトボードは車のトランクの扉の様に上に上がっていて、その奥にビニカへと続くであろう通路を隠していて……、そこから、親父が体半分、正確には右半身を出している。というなんとも不思議な状況だった。

「いや、何これ。理解できん」

俺は呆然としつつ、思わずそんなことを口ばほじつっていた。

そりゃあもう、唖然としたさ。

そんな俺に對して親父は『しまつた』といった感じの目を向けつつ、非常にテキパキとした速さの行動でそこから飛び出し、上に上がつたホワイトボードを下げる、一度、全てをリセットするかの様に頭を振り、俺達の下へと向かつて来て、

「おうおう、恭介じゃないか。アハハ、何してるんだ？」

「いやいや、お前が何してんだよ。親父」

勿論、俺はそんなことに流されはしない。

大体、校庭で不敵に笑つていかにも、探せ、と誘つたのは親父の方じやねえかよ。一体何がしたいんだよ、この強面なのに中身の可笑しなおつさんは。

俺に詰め寄られた親父は、話を逸らす様に視線を俺の隣 桃の方へとやって、

「おうおう桃ちゃんじゃないか！ どうだ、恭介とは上手くやつてるか？」

「……流さんは上手くやつてないみたいですね」

やつぱり桃は黒い女の子みたいだ。桃に確信を付かれるような言葉を掛けられた親父は表情から動きから何まで固めて動かなくなってしまった。その表情に、一滴分の冷や汗が垂れ流されていたのは、息子が見たくない姿だったかもしれない。

暫くして、親父が後頭部を搔きながらガハハと高らかに笑い出して、やつと場が動き出した。

「ガハハ。よし。お前等！ 授業中なんだからさつさと教室に戻れ！」

「いやいやいや、『まかすんじゃねえよ！』

言つが、ここは職員室の前、職員室で待機していた先生方複数名が一ひらへとやってきて、「そうですよー」「授業に戻れ」「サボ

りは殺すぞ」と、俺と桃を追い払おうと迫る。

……、正直、これだけの数に圧倒されるとどうせいつもなかつた。

(くつそ！ 後で問い合わせてやんぞ、親父！)

本当にしかたがないので、俺と桃は引っ込む他の選択肢は選べなかつた。

5

「……、は？」

昼休みを終えて五限目の中授業中。俺が何気なく廊下の方へと田をやると、廊下を歩き去つて行く親父の姿を確認した。

おい、どこに行く？ そつちは空き教室しかねえぞ？

「先生」

俺は立ち上がり、なぜか今回もいるひょろ眼鏡へと声を掛けると、ひょろ眼鏡はビクッと身体を強張らせて、

「な、なななななんだね君は！？ また君かね！ 郁坂恭介君かね！？」

「いやー。そんな驚かれてても。とにかく、先生。漏れそんなんトイレ行かせてもらいますよ？」

「か、かかかかかか勝手にし、しるがよこいつ！」

全く形になつていらない日本語を背中に受けながら、俺は教室を出て右に向かう。こっち側には空き教室しかなく、その先は行き止まりだ。きっと今頃ひょろ眼鏡が「トイレとは逆方向に行つてる！？ 私ばっかりなぜこんなに舐められてるんだ！？」なんて慌てふためいていることだらう。

そんなことはどうだつて良い。今はただ親父の行く手を捲すだけ

だ。

あの親父……、何してやがる。今度ばかりは庵先生の邪魔もないだろう。授業中だから、なんともう関係ない。授業参観でもなければ教員でもない（はず）の親父が学校にいる理由。問い合わせてやる。俺は足早に廊下を進んで空き教室の中を覗き込む。

空き教室は二つある。

まず手前の空き教室は……なし。じゃあ次……いた。親父は空き教室の中心に立ち、辺りを見回しているようだ。一体何してんだ？

「おい、親父。何してんだよ、こんなところで……？」ただ見張るだけ、なんても息子の俺からすれば意味のないことだ、俺は早期の解決を望んでさつそく教室へと足を踏み入れた。すぐ親父は俺に気付き、振り返った。

そうして俺に見せた親父のその表情は、何故だか歪んでいた気がする。

「？」

一瞬だけ、普段は見れない様な表情を見た気がして、俺は僅かに訝つた。何故だらうか、親父が親父じやない様な気が俺の脳裏を一瞬だけ過ぎつたんだ。

が、そんなことは本当に一瞬だけで吹き飛び、

「息子の学校に何用なんだよ？ 何、こんな田舎町のボロ高校で施設に期待でもしてんのか？」

普段の様に、俺は若干の冗談を交えて親父に問う。と、

「……、『恭介か？』」

「何言つてんの、このおっさん？」

「いやいやいや、息子の顔忘れんじゃねえよ？」

俺がいやいや、と大げさなリアクションを撮りながら可笑しそうに、ふざけたように言つと、何故だろうか、目の前の親父の目の色が変わつた気がした。

それは、まるで、鬼の様な、そんな恐ろしい形相で、

一
は
あ
！
？

親父は、その恐ろしい形相を表情に貼り付けたまま、右手を伸ばし、その巨大な掌で俺の首を鷲掴みにして、しかも、その右手一本で軽々と持ち上げやがった。

「……何しやかるんだ、親父……!?」
一瞬だけだが、何かの冗談、じやれてるつもりなのかとも思った。
だが、親父の掌に込められる力はどんどん強くなるし、離そうとしない。これは完全に、殺しに掛かっている。間違いない。

俺が視線を下に落すと、やはり鬼の形相と目が合う。目は血走り、
ひん剥かれ、目玉が飛び出してしまいそうな程に俺を睨みつけてい
るんだよ……！！早く離せクリ新父ッ！」

俺は必死にジタバタと暴れるが、いくら暴れようが親父は俺を掴む手を離さない。

首を絞められていいで大声が出せず、
の存在が、この現状が伝わっていいだらう

といふことは、既に来ない、といふと、なのだから、側には空き教室しかなく、生徒も滅多に来ない。

苦しい、絞められているのに、そんな喉を押し開けて吐き気が俺に迫る。徐々に呼吸は出来なくなり、酸素が脳に補給されず、俺の

意識は真っ白な空白の世界へと溶けてしまいそうになつた。

その、限界一歩手前の時だつた。

「きょううちやん！！」

聞き慣れたはずなのに、聞きなれない大きめな声が聞こえた。きっと、本人は叫んだつもりだろうが、そんな大きな声ではなかつた。勿論、俺は掠れていく意識の中でもその声の主が誰だか分かる。

「……、も、桃……？」

俺がなんとか意識を保ち、首だけ振り返ると、教室の入り口に立つ桃の小柄な姿が見えた。だが、決して何時も通りの姿とは言えず、その姿には、その小ささからは想像もできない逞しさが感じ取れた、かもしけない。

「きょううちやんを離して！」

そう言つ桃は、その可愛らしい姿からはどう見ても、爪先で床を叩いて靴の裏についた汚れを落す様にしか見えない仕草で、超能力を、使つて見せた。

（なつ　ツ！？）

この状況に一番驚いたのは、目の前の親父ではなく、間違いなく俺だつたかと思う。

床につけた桃の爪先から、床を這うよつにして一瞬にして、透き通る綺麗な氷が突如として出現し、鋭く尖る槍の様な形状へと変化して、俺の横を通り過ぎて目の前の親父の横腹へと襲い掛かつた。

「がはあっ！」

その氷は見事に親父の横つ腹を貫き、そこに留まつていた。負傷した親父の掌からは力が抜け、俺は支えをなくして情けないが床に尻から落ちてしまつた。

見上げると、横つ腹に氷の槍を貫かれ、僅かに鮮血を垂らす親父の姿が目の前にあつた。その表情は、苦痛に歪みながらも俺を睨みつけ、相変わらずの鬼の様な形相でいて、不気味にすら思えた。

「あなた……流さんじやないね？」

背後から、桃のそんな言葉が聞こえてきて、振り返つて桃の顔を

確認したばかりの俺は再び親父（？）へと視線を戻す。

「え？ は？ こいつ……、親父じゃないの！？」

「そうだよ。きょうちゃん。大体、流さんがきょうちゃんを殺そうなんてするはずがないでしょ？」

「まあ、そうだけど……」

「まあと、そんなことしてる場合じゃない。」

こんな状況だってのに、そんな会話をすると年頃高校生の俺は少しだけ恥ずかしく感じてしまう。

……勿論、そんなことしてる場合じゃない。

俺は震える脚でなんとか立ち上がり、

「桃！ 逃げないとッ！」

言い、桃の手をとつて走り出そうとするが、 桃は俺の手を払つてそれを拒んだ。

「きょうちゃん。これは結構大変な問題なんだよ？ だから、何もしないで、私の後ろで待つって？」

桃は、今まで感じたこともない気迫を俺に見せつけ、そう言って親父（？）と向き合つた。

桃の言葉の意味は全くと言つて良い程に理解できていないが、なんとなく、逆らつたら危なそうな雰囲気を桃から感じ取り、大人しく身を引くことにした。足を縛れさせながらも一歩程下がつて、桃の背後に情けないが隠れさせて貰う。

そうして、桃の小さな背中越しに先の光景を覗く。

親父（？）は、苦悶の表情で、俺と桃を いや、俺を睨みつけている。まるで、親の仇だといわんばかりの形相だ。あの様子を見て確信する。間違いない、桃が来なかつたら死んでたな、俺。

「で、あなたは何者なのかな？ 話次第では……、殺すよ？」

「ちょ、桃！」

まさか桃から、桃のあんな可愛らしい口から「殺す」なんて言葉が出てくるとは思わなかつたもんと、ついつい口を出してしまう。まあ、典明には散々言つてるみたいだが、それ以外で初めて見たのだ。聞いたのだ。驚いてもしかたがない。が、桃は俺の言葉に何の

反応も示さなかつた。ただ、黙つて見ている、との事なのだらう。

親父（？）は、右手を伸ばし、自身の横つ腹に突き刺さる氷の槍
へ三毛伸ばン

猛烈な悲鳴が叫び、同時にそれを持ち上げた。同時に、その机から作り出した穴、傷跡からは俺の人生でまともに見た事がない量の鮮血が溢れ、教室を汚す。

「うう、わがわがわがわがわーーー!? 何やつてんだよ親父イーーー!?

一流さんじやないけどね

俺の慌てふためいた言葉に桃は冷静に対処する。

野獸の様な雄叫びを上げ、横つ腹に走る痛みを吹き飛ばす勢いで胸を張り、牙を剥く。最早野獸そのままだ。一向に日本語で喋らうとはせず、雄叫びだの呻き声だのを上げるだけだし、きっとこいつは動物なんだな、なんてこの状況で思った。

桃は俺を背後に立たせて、目の前の野獸もとい親父（？）をどうする気なのだろうか？

ଓঁ শশী শশী শশী ।।।

野獸、というよりは熱血教師的な叫び声が、俺の背後、つまりはこの教室の入り口から聞こえてきた。何だ？ と慌てて振り向くと、そこには 親父がいた。前にも親父、後ろにも親父、……なんだこのサンドゥイッチ。

「お、おおおお親父！？」

地の文こそ冷静な俺でも、実際は状況に慌てふためいていてどうしようもない。目の前の方が親父ではない、桃の言葉からそう分かっているのだが、親父が一人いて、俺を嘲笑いながら挟んで追い詰めようとしている印象しか今の俺にはない。

「あ、流さん」

俺のすぐ前に立つ桃は呑気な口調で言つ。

と、親父は、

「殺す」

顔には笑みを貼り付けているのに、そんな表情からは全く想像の出来ない言葉を吐いて、そのまま 親父（？）へと飛び込んだ。足から。

親父のドロップキックは見事なまでに炸裂し、親父の両足の裏は親父（？）の鼻面を確実に捉えて、親父（？）を吹き飛ばした。

親父（？）は鼻から溢れんばかりの鮮血を噴出しながら、ノーバウンドで吹き飛んで窓際に身体を打ち付けて床に落ち、やつと止まつた。窓の下でぐつたりとうな垂れた親父（？）は、親父の一撃によつてすでに意識は失われている様で、ピクリとも動きはしない。

それどころか、死んでいる様にまで思える。

「この親父……散々超能力がどうこう言つてたくせにただの力技で片付けやがつた。これだつたら桃が出した氷の方が……氷？」

「つ、つーか！ 桃！ なんだよ今の氷！？」

俺が慌てた様子で聞くと、桃はきょとんと首を傾げて、「何つて？ 水を圧縮して作り出したただの氷だよ？」

「いやいやいや！ そういうことじやなくて！ つーか水つて

圧縮したら氷になんのか！？ 知らなかつた！」

「何か言つてることが可笑しいよ？ きょうちゃん

もう何がなんだかわかりません！ うがー！ と俺が頭を搔き鳴り絶叫しようとしたところで、親父が俺達の下まで足を運んできた。

「やあ、桃ちゃん。恭介を守つてくれてありがとうね」

「いえいえ。約束ですから」

と、俺にはさつぱりな短い会話を桃と交わしたかと思つと、次に俺に視線をやつて、

「今のが超能力だ、恭介」

と、胸を張つて自慢げに、どことなく満足げに言つてみせた。

……、今のドロップキックのことなのだろうか？ それとも桃の氷の事なのだろうか？ 解く分からぬが、とりあえず無言で頷いて見せた。

すると親父は満足げに一、二度頷いて、俺達の側を離れて親父（？）の方へと歩み寄つた。勿論親父（？）は未だ意識が戻つておらず、鼻から鮮血を溢れさせながらぐつたりとうな垂れている。鼻血だけで致死量に達しているような気もするが、そこはただの高校生な俺には良く分からなかつた。

親父は親父（？）の側までくると、しゃがみ込み、親父（？）の顔に手を翳した。そして、親父がその掌を外すと、そこには親父（？）の表情はなく、どこかに落ちていても可笑しくなさそうな、幸薄そうなハゲかかかつたおじさんの顔が代わりに現れていた。

「え、誰だよ」

思わず独り言の様に突つ込んでしまう。すると側にいた桃が応えてくれる。

「変身系の超能力者だね。しかも、結構ステージの高い。人間に化けられるなんてそういういもん」

「へ？ あ？ え？ つーか。なんで桃そんな馴染んでんだよ！？」

「ん？ だつて私も超能力者だからねえ。流さんと同じ『PCO』所属だよ？」

「ん？ PCO？」

聞き覚えのない単語に俺は思わず首を傾げた。桃が首を傾げたらそりや可愛いが、俺がやるとなんか気持ち悪いな。

親父は、そんな俺を放つたまま、そのおっさんの首根っこを掴み、軽々と持ち上げて、

「桃ちゃん。やっぱりこいつ『ジエネシス』の人間っぽいし本部で捕虜にする。じゃ、恭介の事頼んだよ」

と、親父はあわあわする俺にはほとんど干渉せず、そのまま俺達の横をおっさんを摘んだまま通り過ぎてこの空き教室を出て行つた。何だ、親父。

「うん。頼まなくてもきょりゅうちゃんの面倒は私が見るんだけどね」桃は独り言の様にそう言つて、俺と向き合つ、向き合つ、と言つてもやはり身長差が三センチ近くあり、どうも向き合つてる感じ

はしない。それどころか俺が桃と面と向かって見下している感がスゴイ。だが、勿論今の立場はその逆である。

「なあ……、桃」

「なあに？」

「きょうちゃん？」

俺はそこで一度自身を落ち着かせようと溜息を吐き出し、まるで嘔吐するかの様に桃に吐き出す。

「帰つて良いか？」

「ダメだね」

即答。桃の表情こそいつもどおりの小動物っぽいキヨトンとしたモノであるが、その心中はきっと俺の想像では補えない様な複雑なモノになつてていることだろう。

「じゃあ、どうすれば良いのだろうか」

「とにかく、付いてきて？」

と、桃の先導に俺は付いていくしかなかつた。小さな背中を追いかける俺の姿は変質者に見えてもなんら可笑しくはないだろう。あれだけの騒ぎがあつたというのに、誰一人として教室から出てきはしなかつた。そんな俺の事を見捨てた連中は桃の小さな背中を追う俺をそう見ている。間違いない。典明は寝てやがる。

そうして、桃の先導で俺が来たのは職員室だった。

失礼します、なんて挨拶もなしに俺達は職員室へと脚を踏み入れる。と、職員室に待機している持ち授業のない先生達が俺達に気づいて一警をくれるが、すぐに自身の仕事へと戻つて俺達には全く興味がないと思わせる。

なんだか少しだけ不気味な雰囲気の職員室に何故だか俺は大笑いをかましてみたくなるが、目の前には人をも簡単に殺せる桃がいるし、なんだかバカらしい気もして圧し留めておく。つーか、なんでそんなこと考えたんだろうか。

桃は俺を職員室の前まで先導すると、俺を置いて一人ホワイトボード横にある壁に手を伸ばし 何か操作している様だ。桃の背中が陰になつて俺には何がどうなつて いるのかまでは確認できないが、きっと、アレだ。

と、俺の予想通りに、 ホワイトボードが上へと開き始めた。あの時、親父がこの中から出でくるのを俺は見ている。きっと、こうなるだらうな、 といつ予測は簡単に立つた。

(桃はやつぱり……、なんかスゴイ人なんだろう)

未だ超能力者という言葉に意識しない抵抗がある俺はなんとなく桃を『すごい人』と思つてしまつていた。勿論、あれだけの光景を見て、桃が超能力者であることは明白だつたといえる。

「つーか、何でいつもこいつもコレに反応しないのさ？」

どいつもこいつも、 とは職員室に残る先生方。コレとはホワイトボードのことだ。

そう、桃に問うと、

「何でつて、皆PICOの一員だからだよ？」

「へえー。つて、ええー……」

最早どう反応してよいのか分からず、俺はそんな頗狂で意味不明な反応を桃に見せた。

「つて、さつきからPICOって何なんだよ？」

俺がそう言いきつたところで、ホワイトボードは完全に上へと上がりきり天井と水平に位置を保つて静止した。

再び桃の先導の下、俺はホワイトボードに隠されていた『六』へと足を踏み入れる。そこは、下り坂の洞窟の様な通路だつた。辺りは薄暗く、ハツキリと確認しずらいが、足元は階段で、少し気を抜けば転んでしまつてもおかしくはないと思える。そんな道を進む中、桃は喋りだす。つーか、電気つかないのかね、ここ。

「PICOつてのは、超能力者があつまる組織のこと。ちなみに、創設者は流さんだよ？ でね、」

「いやいやいや、ちょっと待てよ。超能力超能力、といつもこいつ

もー、ンなモン信じりつてか！？」

……、自分でも本当は超能力、とやうのことが事実なんだなあ、なんて認識し始めている。だが、信じたら信じたで負けな気もするんだ。ほら、友達のいうこと信じて実行したら実はドッキリでした、なんて落ちがあるだろ？ それに引っかかる様に警戒しているような、そんな警戒心が俺を日常に留めている。

「こちこそ、いやいやいや、だよ？ コレ見たのにまだそんなことを言つてるの？」

言いながら、歩きながら桃は掌の上に数センチ大の氷で出来た馬を出現させる。それだけ見れば、どこぞの北国での氷で作り出したモニコメントやら飾りに見えるが、俺の目の前で、桃の掌に突如として出現した光景を見たのだ。それが、桃の能力で作り出されたことは明白だった。

生睡を飲み込み、現実に堪えうる俺は、震える声で、

「な、まあ、なんとなく、分からぬでもないけども、なんて言つ
か……、分からぬ」

俺は自身が何言つてんのかサッパリ分からぬ。

と、二人そんなぎこちない雰囲気でひたすら階段を下つていると、やつと、電気が点き出した。この下りの階段の天井部にやたら変な見慣れない形をした電球が並べられている。振り返ると、今まで通つて来た道にもそれは確認できて、今まで暗い中歩いていたのが何故か不満へと変わった。

先を見るが、未だ下へと続く道しか見えない。こりや帰る時相当体力使うことになるぞ……。

俺がそんな無駄な考えを抱いていると、桃は「ぐく自然な動作で掌の氷の馬を消し去り、

「まあ、これから見る光景で、頷くしかなくなるはずだよ？」

普段となんら変わりのない口調、声色、だが、だこかその影には脅すような気配があつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8238z/>

NO, THANK YOU!

2012年1月14日20時53分発行